なつてしまつた。唯安らかに眠つていらつしやるのに寸分異はない。靜かな御顔はどうしても死んでいらつしやるとは思へない。併し其の眠は永遠の眠である。

翌六日にも行つた。御神前には竹田宮と北白川宮から紅白の御菓子がそなへられてゐた。其の日は色々のお手つだひをして午後十二頃お父樣と二人で家に歸つた。七日も午後から行つた。七日には久邇宮からいたゞいたおそなへや其の他の宮樣からも少し來てゐた。八日十一時半少し前に行くと、十一時に勅使がいらつしやつて聖上陛下から御榊一對・紅白の絹各一匹づゝと、御神酒・鯛・鯣・昆布・おそなへ・御米・リンゴの七種類のものと、皇后陛下から御榊一對の御下賜があつて、其の他天皇陛下からは特別に御沙汰書があつた。僕は其の沙汰書を叔父樣に讀んでいたゞいて、其のわけを解釋していたゞいた。それには色々の有りがたい事が書いてあつた。

午前十一時半に久邇宮が御自身で御出下さつた。さうして御料理百人前を下さつた。九日は葬儀の日であつた。朝十時頃に黑木に行つた。棺前祭が十一時にあり、其の後に晝飯をいたゞいてから、最後に御棺のふたをあけて御別れをした。午後一時二十分頃になると、僕は孫の代表の一人になつてお父樣と青山祭場へ向つた。祭場の前へ行くと兵士がラッパを吹いた。僕はその時祖父に對してどうしてもえらくならなければならないといふ感じがした。

葬儀の時御棺の前に聖上陛下と皇后陛下の御榊を始めとして、十一家の宮樣から來た御榊と內外十一個勳章がかざられてあつた。僕はそれを見て「日本の勳章はお返しするのだから、僕は又それをいたゞいてゐて、外國の勳章はお返ししないけれどもやはり同じ勳章をいたゞいてゐて、そして僕が死んだら天皇皇后兩陛下を始めとして宮樣からもあの樣に御榊や其の他の物をいたゞく樣にえらい人になりたい。」と思つた。

大口論（C男）

昨日の豫課の時の事であつた。鹿兒島先生が算術の應用問題をお出しになつた。そのうちにかういふ問題があつた。

「甲の原價は乙の原價の十分の八である。今甲を賣つて六圓を利し乙を一割二分損して賣つたら損益なくなるといふ。甲の賣價は何程か。」

此の問題を望月君が黑板の所へ出て行つてやつたが、答は四十六圓となつてゐた。これにあつた人は鳩山君の外にまだだいぶあつたやうだ。其の時先生が「外にちがつた人。」とおつしやつたので、僕等は先生に「答六十六圓です。」と言つた。この答にあつてゐる人の方が前のにあつてゐる人より多かつた。

さうすると先生は說明をなさつて、「答は六十六圓がよろしい。」とおつしやつた。すると僕の橫にゐる鳩山君が「先生はちがつていらつしやる。五十圓の乙の原價に一割二分かけると六圓になる。それだから六圓利して賣つたから損した六圓と益した六圓とできえて損益がなくなるのだから、僕の方がたしかによい

はずだ。」と言ひ出した。僕は「しかしこの原價の七十五圓に一から一割二分引いた殘りの八割八分をかけると甲の賣價の六十六圓になるから、損益がないといふのだから、ちやうど兩方が等しくなるからよいぢやないか。」とその答に應じた。

「いやちがふ。」「いやかうだ。」と口論をはじめて、豫課が終つてからは一そうもうれつに鳩山君とした。もう鳩山君は泣きさうになつてゐるくせに、まだ自分の方がよいと主張してゐる。しまひにつまらなくなつたのでよしてしまつた。しかししやくにさはるので家へ歸つて父が歸るが早いか、すぐにその事を父に言つてきいて見た。すると父はそれは鳩山君のいふ方がただしいといはれてしまつた。さうしてこの口論も鳩山君が勝つてしまつた。

僕の畠（D　男）

僕は小石川の家にこして來て、「何かたのしみはないかしら。」と考へた末、考へついたのは畠を作ることである。居ても立つても居られなくなつたので、母にお許しを受け種を買つて來ることにした。學校に來てどうもおちつかない。いつもの五時間も十時間のやうに永く思はれた。學校が終ると直にかへつた。

植木屋さんの所まで來て、どれを買はうかと考へて先一番早く出來て、一番手のかゝらない廿日大根の種と、外の花の種を買つた。家に着くとすぐカバンを置き畠作りをした。日向の一坪位の所に眞中に小さな道をつけ、まはりを小石でかこんだ。そのよく日は雨がふり、二日目に女中が芽が出たといつて知らせてくれた。いつて見るとかはいゝ小さい芽が、所々にちよこん〳〵と出てゐる。僕はその時うれしくてたまらなかつた。

五六日たつて家にかへつて見るよ驚いた。今朝まであつた畠、僕の樂しみにしてゐた畠がいつの間にかなくなつてゐる。僕がべそをかきながら家の中に入つてきいて見ると、裏にうつしたといふことである。早速見に行くと前よりりつぱに出來てゐる。おこつてゐた胸も靜まつたが、なんだかまだ芽の出ない花のことが心配であつた。しかしすんだことだから仕方がない。それから廿日たつた日に行つて見たが、大根はまだ食べられさうもない。あと十日たつてとることにした。やがてその日は來た。行つて見ると上出來。僕はかたつぱしからひつこぬいて、臺所に持つて來て明日のおこうこにしてもらつた。

廿日大根がつきたから昨日なすの苗、いんげんの苗、廿日大根と白かぶの種を買つた。僕は植ゑる時初め少し土を掘り、その上にうすく油かすをひいて植ゑるのである。僕はこういふ風に自分で作つた物を食べるのを何よりの樂しみとして居る。

母（E男）

僕はこの間茶の間の疊へインキをこぼした。僕は前に「茶の間でインキをつかつてはいけない。」とおかあさまがおつしやつたのに、つかつてこぼしたので僕はすぐひざでインキのこぼれたのをかくしてしまつて、手でふいてしまつた。それでもとれないのでふいたらまだうすく見えるので、その上へ僕の本をおい

てかくしておいた。そして僕は勉強をすましてれようとすると、お母樣は僕をおよびになつた。

僕はさつきインキをこぼしたので、むれがどきつとした。僕はこはごはお母樣の所へ行つた。お母樣は僕に「お母樣になにか言ふことはないか。」とおつしやつた。僕は「何にもありません。」と言つた。お母樣はだまつていらつしやつた。僕は早くなにかおつしやつて下さればよいがなと思つた。しばらくするとお母樣は涙をながされた。僕はもう心の中が苦しくて〳〵たまらなくなつたので、思ひきつて「お母樣ごめん下さい。インキをこぼしました。」と言つて僕は泣いてしまつた。お母樣は人は正直にしなくてはいけないとか、色々やさしく敎へて下さつた。

僕はこの時ほど身にしみたことはなかつた。そして「この樣なありがたいよいお母樣には、これからはよい事をたくさんしよう。」と思つた。僕はねまにはいつてからも母の事を考へて涙を流した。

運　動（F　男）

運動は勉强と共に大切なものである。運動と云ふものは筋肉を勞するも　でつまり野球・フツトボール・バスケツトボール・キャプテンボール・キツクボール・庭球・圓盤投・砲丸投・槍投・ダンス・ランニング・ボートレース等である。今僕等はあまりはげしい運動は出來ないが、少し大きくなれば少し位運動を多くやつてもよいのであらう。

あまり運動ばかりして身體をいためてもいけないし又あまり勉强をしすぎて身體をいためてもいけないし、ちやうど適度にしなければならない。僕等は運動と云へばすぐ前に書いた位なことは思ひ出すが、運動は數知れぬ程たくさんある。運動の選手は唯運動ばかり出來てもだめでそれに相當して勉强も出來なければいけないのである。それだから勉强と運動とを適度にして身體をきたへなければいけない。

「A男」の書いた「未來の僕」を讀んで見ると、伸びて來た文の深さがはつきり解かる。「A男」はかなりしつかりした人生觀を有つてゐる。その人生觀は、尋常三四學年時代に描いたやうな空漠たるものではない。餘程現實味を有つてゐる。外面的でないところも嬉しい。善良な敎師の內面的な考察が深く掘り下げられてゐる。「帝大の敎授が必ずしもえらいとは言はれない。」も面白い。更に「A男」は生活の趣味を見出してゐる。その趣味も空想的なものではなく、現實に面した確實性を有つてゐる。尋常五學年で綴つた「植物採集」を參考するがよい。なるほど、現はし方の混雜や用語の的確さを缺いた所もある。一時間にまとめたものとしては致し方もない。この種の題材をマスターすることは、餘程すぐれた兒童でなければ出來ない。

「祖父の死」は「B男」の作である。この頃の男兒は、物事を理屈つぽく考へるやうになつて、動もすれば描寫が鈍るやうな傾向さへ見る。けれども、「B男」のこの作品は描寫のかなりすぐれたものである。「死體のある別室に行くと……」のあたりがそれである。叙事もかなり順序よく運ばれてゐる。要點を捉へてぐん／＼叙事を進めてゐるが、その爲に文の味を失はない。内容には「B男」の常識を想はせるものがある。かうした場面の空氣も自然に醸されてゐる。内省も決して淺くない。尋常五學年で綴つた「社會主義」の文と比較して、面白い對象であると思ふ。

「C男」の作である「大口論」を讀んで見よう。算術のけいこで議論に花の咲いたことを題材としたものである。かうした題材で綴る場合には、餘程頭のよい兒童でないと論理の混雜がある。また、かうした事實を叙述する場合には、論理と叙述の間に現はし方の不備が出來る。これはかなり高學年に進んでも折々見られる缺陷である。が、「C男」はこの難關をりつぱに切りぬけてゐる。これは同男が頭の論理的なことを證據だてるものである。描寫が巧だとは言へない。けれども、筋の通つたはつきりした文を書いてゐたことは事實である。「さうしてこの口論も鳩山君が勝つてしまつた。」とあるのも面白い。

「僕の畠」は「D男」の作である。この文は「D男」が尋常六學年のはじめに書いたものであるから、前學年に擧げた「旅行」と比較して異常な進境を語つてはゐない。けれども、同男の取扱つてゐる内容は、決して低學年の兒童が自由に出來るものではない。場所、日數、草花、作業、心持などが相當にマスターされてゐる。

「E男」の作である「母」は、讀者を感動させるものである。同男が六箇年間の表現中、最も感激の深さを想はせるものである。同男は常識の發達を想はせるやうな文は書かない。けれども、彼の生活には生一本な眞面目さがある。彼はさうした行き方で人を動かした。尋常五學年頃迄は自己の好む教科以外は餘り顧なかつた。ところが、尋常六學年になつてからは急に自發的に勉强するやうになつた。「母」はこの緊張した

生活中の作品である。この作には叙述の不備は見出すことが出來る。が、彼の僞らざる告白と眞摯な内省には、何人も襟を正さなければならない。「僕はこの時ほど身にしみたことはなかつた。そしてこの様なありがたいよいお母様には、これからはよい事をたくさんしようと思つた。僕はねまにはいつてからも母の事を考へて涙を流した。」——なんといふいぢらしい内省であらう。私はかうした教へ子を見出したことを光榮に思ふのである。

「F男」の「運動」も最後の記錄である。内省に公正を求めてゐるところは、同男の進境を語るものであると思ふ。「今僕等はあまりはげしい運動は出來ないが、少し大きくなれば少し位運動を多くやつてもよいのであらう。」とか「あまり運動ばかりして身體をいためてもいけないし又あまり勉强をしすぎて身體をいためてもいけないし……」とかいふのはその例である。最後に「それだから勉强と運動とを適度にし身體をきたへなければいけない。」と結んだのも、同男としてはかなりの進境である。要するに綴り方の成績には、時と場合によつて非常な出來不出來がある。從つて一二の作品で優劣を斷ずることは出來ない。これは是非共尋常一學年からの成績を通覽して、その傾向を見出さなければならない。私の行き方は優劣を斷ずるのが主ではない。傾向と伸展のあとを見たい爲の努力である。

第二節　兒童の成績（女）

我が理想（A女）

私がほんの物心ついた頃は、こんな理想を持つてゐた。大きくなつたらナイチンゲールのやうなかんご婦さんになりたいと。その頃お父樣の本箱の上には幼いナイチンゲールが傷いた犬にほうたいして居る置物がおいてあつた。それで始終お母樣から彼女の優しい話を聞いて居たからである。よく痛くもない指に白いきれを澤山まきつけたものだ。けれどもその理想も小學校へ上る頃になると變つて來た。

少しづゝ繪を書く事に興味を持つて來た自分は、小學校を出たらそれから女子美術にはいつて畫家にならうと思つてゐた。けれども三四年になると、學課が面白くなつて先生に成りたいと思つた。その證據に

は、よく近所の友達を集めて來ては、自分が先生になつて學校ごつこをやつたものだ。けれどもやつぱり小さい時の考は一時的なものである。今の私の理想は、かんご婦も嫌だ。畫家も嫌だ。さうかさいつて先生にもなる考はない。

今の私の理想はたつた一つ心の奧底で輝いてゐる。それは一生を詩や小説を作つて過したいさ。まづどこかの女學校を卒業したら、專門の學校へ入學したい。專門科を出たら專らその道を研究したい。でも私はあまり新しがりの女になりたくない。さうかといつて平凡にくちて行くのはつまらない事だ。研究して成功したら外國へ行きたい。これが私の最後の願ひなのである。

佛蘭西あたりの文學を思ふまゝに研究出來たら、それこそ私の理想をはたせる時なのである。私はまだこれから小學校を卒業する幼い者なのだ。これから女學校あたりへ行つたら、その理想が變るかも知れない。いやけれども私は變らせまい。そして一度もえた胸のほのほを段々熱して行くやうに心がけよう。

なつかしいお國よ（A女）

さやうならさやうなら
なつかしい利根川よ　さやうなら
涼しいお山よ　さやうなら
靜かなポプラの並木よ　さやうなら
あゝ、もつと此の景色を見てたいな
けれど汽車はなつかしいお國をすてゝ走つて行く
もう夕方だ　西の空はオレンヂ色に
昨日迄は土手の上で眺めた夕燒を
今日は車窓から眺める
さやうなら　さやうなら
なつかしいお國よ　さやうなら

雲（B女）

雲は四季によつて色々と形を變へるが、中でも私の最も好きなのは夏の雲と秋の雲である。夏の雲といふと、すぐに海邊の夏を思ひ出す。空と水とをくつきりと境する水平線と、彼方から眞白な雲が出てゐる所は本當に氣持がよい。又濱べに漁師の家が三四軒ちらばつてゐて、後にある松原のあたりから白雲が湧き出てゐるのは、見てゐると氣が晴々する。本當に夏の雲は元氣がいゝ。

くつきりと快く澄み渡つた秋の空を、綿の樣な雲が浮いてゐるのも又いゝ景色である。窓によつて西の方に流れて行く雲を眺めてゐると、何時もお姉樣の事を想ひ出す。あの雲が流れて行く彼方には、優しいお姉樣がいらつしやるのだと思ふと、雲がたまらなくなつかしい。私は雲を眺めてお姉樣の事を考へるの

が大好きである。この樣に私は雲が大好きであるが、たゞ雨雲だけは大きらひである。空一ぱいに灰色の雲がひろがり、太陽の光はちつとも見えず、何から何までじめ〳〵としめつてゐる樣な日はいやでたまらない。こんな日にはいつも自分の心が沈んでしまつて、何をやつても晴々した氣持にはなれない。やつと雨が止んで雲の切目から青空が見え出し、太陽が照り出した時は何とも言へぬ喜びを感ずる。

又夕燒雲や日の出る時の雲の色は本當に美しい。東の空が段々と紅色がゝつて太陽が出ると共に黃金色に變るのは、大へん美しく雄大な感を起させる。日が西に沈み、あたりの雲が淡紅色に輝くのはこの上もなく美しい。それが段々と暗黑色に變じて行くのを眺める時は、全く何事も忘れてしまふ。そして全く灰色になつた時始めてあつけない感を起す。私は雲を見るのが大好きである。そしてなるたけ晴天の日が續くやうに祈つてゐる。

お姉樣へ（B女）

だん〳〵冬らしくなつて參りました。もう手水鉢や池には氷がはつて居ります。町を往來する人々も何となくざわついて、到る所に暮氣分がたゞよつてゐます。そちらもお寒いでせうね。和ちやんも大きくなつたでせう。會つて見たくてたまりません。お別れしたあの日から算へると、もう一月にもなるのですもの。どんなに大きくなつたでせう。

私も近頃は中々いそがしうございます。女學校の入學試驗もあと三ヶ月しかありません。飯田先生もお腹の惡いのをおして學校に來られ、私達を敎へはげまして下さいます。どうして私達が怠ける事が出來ませう。

昨日やうやく學期試驗が終りました。もう二十三日（通知表をいたゞく日）を待つばかりです。よい成績を取るやうに祈つてゐます。お母樣も此の頃は大變働いていらつしやいます。梅ちやん（女中）が岐阜に行つても、少しも不自由を感じません。お母樣の有りがた味がしみ〴〵と分かる樣な氣がします。ではお正月には和ちやんを連れてこちらにいらつしやい。たのしみにして待つてゐます。さやうなら。

弟（C女）

弟は今年五歲になつた。家の中を最もにぎやかにするのは此の弟である。朝は大がい六時半頃から目をさまして床の中でさわいでゐる。朝の御飯は一番早く食べる。それがすむと机に向ふのを例としてゐる。そして圓い左の手に鉛筆を持つて何やら紙の上に書くのである。又積木や汽車で遊ぶ事も多い。近頃はトランプを並べて遊ぶやうにもなつた。お晝近くなるとしきりに御飯をせがむ御飯はずゐぶん澤山食べる。又おやつも色々注文して食べる。夕方になるとお部屋のお掃除をしたがる。長いはうきを持つて疊の上をはく時はずゐぶん熱心だ。けれどもおそくてきたないので本當に困る。夜は大抵七時半頃に寢る。大きい弟と競爭でねまきをきかへる。

此の樣にして弟の一日は終る。弟はずゐぶん生意氣になつて來た。或朝も顏を洗ふ時、「濱ちやん一つ心配な事があるんだけど。」といふ。何と聞いたら勉強が心配だといふ。そして勉強がすんでしまへば安心

だ等といつた。又弟は算術の問題を出す。大抵十から一引く位の問題であるが、人が正しい答をいふと後から又一つ足したの何のといつて人を問違ひさせてしまふ。小さいくせに大きい人の仲間に入つて話を聞いてゐる事等もある。

又弟は本當に愉快さうだ。おふろに入る時等面白い事をいつてお母様を笑はせる。出て來る時は赤いりんごのやうなほゝをしてゐる。そしてぴよん／＼飛びはれて寢床へ行く時などは、はたの人まで嬉しくなる。本當に弟は可愛らしい。

う　そ　（D女）

「お前にうそをいつた事があるか。」と問はれた時、私はいやでも「エヽ。」と答へなければならない。生れてから私はうそは幾度もいつた。うそをいつた時は必らず心の中に苦しい事があつた。この間の事であつた。お母様が洋服の下着をかへておけとあれ程おつしやつたのに遊ぶのに氣を取られてわすれてゐた。しばらくしてから、「かへておいたらうね。」とおつしやつた時ハツとしたが、口先で「エヽ」と答へてお母様のおいでにならない時急いで取りかへた。

けれども私の心はおだやかでなかつた。自分の部屋に行つてさつきの事を考へた。その時、「うそは惡い事です、早くお母様の所へ行つてあやまつていらつしやい。」と眞心がきびしくしかるやうにいつた。私はすぐ眞心にはげまされて、お母様の所へ行つてあやまつた。「決してこれからうそをついてはいけません。」

と唯々それだけしかおつしやらなかつたが、お母様のお顔は一日中曇つてゐた。私は其の日床に入つて考へた。「うそをつく程苦しくてはずかしい事はない。」と。

ず　る　い　人　（E女）

この間のゑんの日の時であつた。お母様と妹二人と私とでゑん日に行つた。そして歸りにおもちやを賣つてゐる店に來た。小さい妹はそこでおもちやを買つた。それでお母様は其の人の前に十錢札を一枚おいた。そしてお母様がちよつと他の方を見た間に其の人はお金をとつた樣だつた。私たちはそこを出ようとした時、其の人はお母様に、「ちよつとあなたお金は。」といつた。お母様は、「今上げたのではないのですか。」といつても其人はあくまで「取らない。」と言つてゐた。それでお母様は又十錢札を渡してそこを出た。しばらくしてから私はお母様に、「もう一度そういつて來ませうか。」といへばお母様は「およしなさい。あんな人と言爭つてもつまらないから。」とおとめになつた。十錢札位多く取られてもしかたがないが、ゑん日などにこんな惡い人がゐて、多くの人をだますやうな事をして、お金を多く取つたりするのが殘念だつた。これからはそういふ人をこらしていかなければならない。

そして互に正直に賣つたり、買つたりしなければならない。私は家に歸つてから一人考へた。あんなゑん日等の大ぜいの人の中にはあんなずるい人はあの人だけではなく、まだほかにも居るのだらうと。

一二年時代　（F女）

第七年　尋常小學第六學年

私が一年の時のことであつた。私とお兄さんと一しよに學校へいつた。その日は雨がふつてゐた。辻町まで來るとお兄さんのお友達が後から來たのでふり向いた拍子に私は足駄であつたのでお汁粉のやうな電車通りにころんでしまつた。私はつめたくていたいのでこゑをたてゝ泣いてしまつた。お兄樣は、「そんなになくとおいて兄さん一人さきに行くよ。」といはれます〳〵かなしくなつてないた。やがて窪町附近に來ると、又ころんで學校の門まで來ると又ころんだ。私は又泣いた。そこへ肥後先生がいらつしやつて私の手を引いて、「大丈夫〳〵。」といつて親切に小使室までつれていつて下さつた。やがて羽織はかまを小使さんにかはかしておいてもらつてはかまもはかずに教室に入ると、もう授業がはじまつてゐた。そつとドアを明けると皆さんが私がはかまをはいてゐないのでジロ〳〵とみつめてゐたので私ははづかしくて〳〵たまらなかつた。又二年ころの時、私と仁科さんと上加世田さんと一しよに學校の門を出たすると一人のとんびを着たへんな丈の高い人が一部の人たちに、君の家はどことかいろ〳〵のことをいつてゐた。仁科さんと上加世田さん私の三人は人さらひだと知つたので、三人はしつかり手をにぎりながら一目散に逃げた。けれども三人のうちの私だけは足がおそい仁科さん上加世田さんは早いので早く〳〵と左右から仁科さんや上加世田さんがひつぱるけれども氣だけあせつても足が前に進まない。私はもうまつさをになつた。やがて電車通りに出た。三人は急いで人力宿の中に飛び込んだ。人力宿の人はびつくりしてゐたが上加世田さんがその事を人力宿の人に話した。

しばらくするとそのへんな男はうまや橋方面に行く電車の中に入つた。私達三人はほつとして人力宿を出て家に歸つたこともあつた。又學校で私より一級下の二部の一年のもろ岡さんにしつこくからみつかれて私をはなさない。私はその時又泣いた。私は今このことを思ふとおかしくてたまらない。

「我が理想」は「A女」の作である。「A男」の「未來の僕」と比較して見るのも面白い。「A女」の理想は、かなり深い内省が伴つてゐる。一時の思ひつきではない。長い間培はれた人生觀が閃いてゐる。「でも私はあまり新しがりの女になりたくない。さうかといつて平凡にくちて行くのはつまらない事だ。」とか、「佛蘭西あたりの文學を思ふまゝに研究出來たら、それこそ私の理想のはたせる時である。」などは、この頃の兒童として稀に見る深さである。

手法も非常にすぐれてゐる。理想の發達を述べて自己の生活を鑑賞してゐる。看護婦さんから畫家に移り、畫家から先生に轉じ、先生から文學者に變つてゐる。しかも、「よく痛くもない指に白いきれを澤山まきつけたものだ。」とか、「その證據には、よく近

所の友達を集めて來ては、自分が先生になつて學校ごつこをやつたものだ。」といふやうな味が出てゐる。內容に卽して現はし方が自由である。何處にも讀者を危ぶませるものがない。これは「A男」にも見出せない伸展である。同女は盛に詩も作つた。繪も書いた。「なつかしいお國よ」は「A女」の作つた詩の一端を示したものである。そして、折々童話や少女小說も書いた。この種の創作も決して現實味のない、架空なものではなかつた。現實の生活を凝視した人間性の深さを想はせるのものであつた。

「B女」の「雲」もすぐれてゐる作品である。雲を見て驚異を感じない者はあるまい。けれども、さうした題材で表現する兒童は割合に少い。更にかうした見方をする兒童は極めて稀である。同女はよく雲を見てゐる。同時によく自己を見てゐる。「窓によつて西の方に流れて行く雲を眺めてゐると、何時もお姉樣の事を想ひ出す……」も、同女の美しい心を物語つてゐる。雨雲を描いたあたりは、描寫の伸展を示してゐる。構想も決して凡ではない。讀者を新味へ新味へと運んで行つて、讀み終つても惜しいといふ感を有たせる。「お姉樣へ」は、「B女」の美しい心と人間的な常識の發達を想はせる文である。同女は、なつかしいお姉樣へどのくらゐ手紙を書いたかしれない。この文もその一つである。行屆いてゐると思ふ。

「弟」は「C女」の作である。よい文であると思ふ。弟の生活を簡潔に、しかも味を失はないで述べてゐる。先に弟の一日の生活を述べ、それから印象の深い、弟の性質を如實に現はしてゐるやうな材料を選んで、文の味を出さうと努めてゐる。同女は題材をすべて自分のものにしてゐる。鑑賞が屆いてゐるからである。「家の中を最もにぎやかにするのは此の弟である。」——「それがすむと机に向ふのを例としてゐる。」——「近頃はトランプを並べて遊ぶやうになつた。」——「又おやつも色々注文して食べる。」——「夕方になるとお部屋のお掃除をしたがる。」——「大きい弟と競爭でねまきをきかへる。」——「此の樣にして弟の一日は終る。」——「弟はずゐぶん生意氣になつた。」——など擧げて見ると澤山ある。これは「我が理想」や「雲」などゝ違つて、題材を我が

物とするに都合のよいものであるが、これだけに引締つた文を書いたことは、六箇年間のレコードとしてりつぱなものであると思ふ。

「D女」の書いた「うそ」は内省の深さを示すものである。「お前はうそをいつた事があるか。」と問はれた時、私はいやでも「エヽ」と答へなければならない——これが兒童を眞實な生活へ運ぶ出發點である。綴り方の學習も、かうした態度の養成が肝要である。この眞摯な態度から眞實なものを見出す。此處に述べてゐる母に對しての嘘も、この眞摯な態度が出來てゐたので「私はすぐ良心にはげまされて、お母樣の所へ行つてあやまつた。」といふ美しい生活を見出したのである。彼女の内省はかうして更に深く掘り下げられて行くのである。敍述にも無駄がない。外面から次第に内面へ伸びて來た同女の發達が嬉しい。

「ずるい人」は「E女」の作である。「E女」はかなり描寫の方面に伸びた兒童である。緣日などの題材では、必ず場景の描寫へ行かうとする傾向を有つてゐた。けれども、この作は同女として異例である。「D女」の「うそ」のやうに、内省の深さを暗示するものである。「十錢札位多く取られてもしかたがないが、ゑん日などにこんな惡い人がゐて、多くの人をだますやうな事をして、お金を多く取つたりするのが殘念だつた。」とあるのがその一例である。内省の深さが、「A女」や「B女」に見るやうなものでないのは、人間性の發達として致し方のないことである。

「一二年時代」——これは「F女」の作である。この頃になると、よくこの種の題材で文を綴る。私は「生ひ立ちの記」を卒業記念として綴らせてゐるが、これもその一斷片である。この作には異常な深さは見出せないが、題材が熟してゐることは明かである。言葉を換へて言へば生活の鑑賞がある。從つて相當の味も出てゐる。彼女の記錄として決して劣つたものではない。が、同女の成績を通覽すると、まだ伸ぶべくして伸びないものを見出すのは遺憾である。

第三節　文の批評と鑑賞力

參考文を與へて兒童の批評力や鑑賞力を養ふことは、私の指導として重大な仕事である。如何なる參考文を用意するかは、時と場合によつて違つて來る。が、文は綴るだけでは伸びない。批評と鑑賞の意義や、その實際的指導は小著「綴り方の內面的研究」に述べて置いたから參考して貰ひたい。

私は參考文に就いて、兒童の批評し鑑賞する力の伸びたあとを眺めようとしてゐる。これは、半面から兒童の綴る力の考察となるからである。その爲に、私は各學年について、また各種の參考文について批評し鑑賞したあとを記錄としてのこしてゐる。これは如何なる參考文を選ぶかによつて、實際的な成績を擧げる上に非常な關係がある。此處に擧げたのはその一例である。參考文を擧げて次ぎに批評や鑑賞の記錄を添へる必要がある。これも各學年各種の參考文について成績を求めることになると、かなり多數の頁を割かなければならない。さうした企は此處で望むことが出來ないから、遺憾ながら二三の例を擧げて私の行き方を理解していたゞかうと思ふ。

共　同　（男）

何事をするにも「共同」に限る。人間の生活を見ても、動物の生活を見ても皆共同してゐる。共同生活をしてゐるものは皆發達してゐる。僕はつぎの事を見て、共同の大切な事を感じた。

或る夏の暑い日のことであつた。庭に澤山の蟻がうろついてゐる。かなり大きな毛蟲がその邊をはつてゐた。一匹の蟻がこれを見つけて、その横腹にかみついた。蟲は驚ろいてあばれたが、蟻は決してはなれない。けれども大きい蟲に小さい蟻だから、毛蟲は急いで逃げようとする。その邊を二匹の蟻がうろついてゐた。この毛蟲を見つけると前の蟻に加勢して、やたらにかみついた。さすがの毛蟲も、次第に勢がなくなつてとう／＼たふれてしまつた。蟻は大よろこびで、これを引

ばつて行かうとしたが、三匹ではとても引ばれない。その中に二匹三匹と、だん〳〵蟻の仲間がやつて來て、とう〳〵穴の中へ引ずり込んでしまつた。こんな例は澤山あるが、全く共同のおかげである。悪いことをいふとけんくわでも共同すれば勝つ。僕の級の人數は四十一名ある。この四十一名の者が共同してやれば、どんな事でも出來ない事はない。掃除當番でも、野球でも、勉强でも共同してやれば必らずうまく行く。惡い事を共同してやることはよくないが、よいことなら何でも共同してやるに限る。我々は共同といふ事を忘れてはならない。

批評

1 まづ題がよろしい。共同といつて見れば何でもないが、題にしたのは面白いことである。文もうまい。共同の議論だけを書かないで、例を擧げて書いたところがよい。けれども共同しないでやりそこなつた例も擧げるとよいと思ふ。(男)

2 共同といふ題を選んだのはえらい。又自分の考がよくあらはれてゐる。所々へ例を入れたことなどは、他の人のまれの出來ないことである。共同の大切なことがよくわかる。始めの方などは實にりつぱだ。作者の眞面目なことがよくわかる。例の中に共同してやれは時間のけいざいなことも入れるとよいと思ふ。(男)

3 自分の考をどん〳〵書いて、その考の深い所は感心である。文の順序もよい。共同の大切なことを感じたと書き、そのことを實例にし、次に自分たちも共同をすればよいと書いた所もよい。(男)

4 共同の大切なことがよく現はれてゐます。「共同生活をしてゐる者は皆發達してゐる。」と書いた所はよいと思ひます。蟻のやうな小さいものにまで目をつけた所は、實に綴り方の心得がよいと思ひます。議論と例がうまく入つてゐると思ひます。(女)

5 題がよいと思ひます。蟻の例を入れたのもよいと思ひます。しかし人間の間に起つた事ならなほよいと思ひます。この作者はよく物を見てゐるといふことがわかります。それから共同しいなで非常にこんなした事などを書いて見たらどうでせう。(女)

6 一番初めの句がよい。例のよいのを見つけてある。自分の組の例を出したのもよい。書きあらはし方も上手である。この文を讀めば共同の大切なことがよくわかる。考へもふかいと思ふ。(女)

朝景色 (男)

僕はにはとりの聲に夢からさめた。何となく山の手の方は田舎じみてゐる。僕

はいつものやうに、夜具の中でもぢ〳〵してゐた。その時急に修身で習つた、習慣といふことに氣がついた。飯田先生が黒板にお書きになつた。忍耐實行などの文字も、目に見えるやうな氣がする。

僕は思ひ切つてパッと飛起きた。時計を見ると、まだ早い。一仕事してやれと思つて、梯子段を上つた。そして戸を開けた。猫がぬれ椽に横になつて眠つてゐる。僕は猫を起すのも氣の毒と思つて、そつと戸をあけた。猫はまだ眠つてゐる。

戸を開けてから見渡すと、人家が果てもなくつゞいてゐる。東京にゐて、はじめて東京が廣いやうに感じた。月がうすく雲間から見える。東の方からは、いま太陽が上らうとしてゐる。屋根からのぞいてゐるやうである。あたりの雲は、紫色にあやどられてゐる。

階下から急に障子をたゝく音が聞えた。誰か起きたのだらう。猫がびつくりしてびつくと起き上つた。お隣の敏ちやんが、ねぼけ顔して雨戸をくりかけた。僕の顔を見ると、恥かしさうに急いで引込んでしまつた。

加島さんの裏から、何やら變なものが上つた。何だらう。とよく見るとたこだつた。「たこ氣狂、もう空高くたこを上げてゐる。」――僕はひとりごとを言ひながら二階から下りた。

批評

1よい材料である。朝の氣分がよく現はれてゐる。作者はよく氣をつけて見てゐるといふことがわかる。文の初めの方はなんだかこしらへたやうに思はれるが、戸を開けて東京中を見渡した時の感じや、お隣の敏ちやんのことや、たこの事などは大變面白い。よく書けてゐると思ふ。(男)

2初めの方は面白く書いてあるが、何だかへんに思はれる。全體がよくまとまつて書けてゐる。朝の心持がよくあらはれてゐる。敏ちやんやたこの事も文に面白味がある。猫が寒い所にねてゐるのは少しへんだ。(男)

3「にはとりの聲に夢からさめた。」と書きはじめたのはよい。何日かをはつきり書いた方がよい。この題は朝景色といふのだから、もつとあたりの景色を書いたらよいであらう。三分の二は家の事である。(男)

4 よく書けてゐると思ひます。文の書き出しも、文の終りもよくかけてゐて、朝の氣分がよくあらはれてゐます。猫がれてゐることや、東京にゐてはじめて東京が廣いやうに感じたことなどもよいと思ひます。敏ちやんのねぼけ顏も面白いと思ひます。(女)

5 朝といふときつとにはとりのことを書くが、何だか作り事のやうな氣がします。山の手の方は田舍じみてゐると書かないで、どんな事が田舍じみてゐるか書いた方がよいと思ひます。一仕事してやれと書いてあつても、何が一仕事であるかはつきりしません。けれども、朝の心持はよく現はれてゐます。太陽の上る所や、敏ちやんの起きたところなどは、ほんたうにさうだと思ひます。(女)

6 題を「朝景色」としないで、「ある朝」とした方がよいと思ひます。山の手の方の景色をもつと書いたらよいと思ひます。「たこ氣狂、もう空高くたこを上げてゐる。」は少しへんです。けれども、朝の心持が現はれてゐて割合によい文だと思ひます。(女)

私の手　(女)

私の手はずいぶん大きい。そして指が長くていやに平たい。松本さんの手はやせてゐるので、皆におばあさんの手だといはれる。けんども私はそれが羨ましい。ほつそりして器用な松本さんの手を見てから、不格好で不器用な私の手を見ると、ほんとうにいやになつてしまふ。

私の手でもう一ついやに思ふことは、指先がふくらんでゐることである。指先がすらりとしてゐる人は、裁縫がうまいといはれてゐるが、私は本當に裁縫がまづい。だから私は裁縫がきらひなのである。

私の爪は、ずつと前に人さし指とくすり指に白い點があつた。誰だかゞ「あなたは大きくなると、着物持になるわよ。」とおつしやつたが、私は着物持になりたいとは別に思つてゐない。今はもうその白い點がなくなつてしまつた。そして、後から出來た白い點がかすかに見えるだけである。

私はたゞ一つ自分の手に感謝してゐることがある。それは霜やけやあかぎれが出來ないことである。峯岸さんが霜やけのために、手にほうたいしていらつしやるのや、家の乳母があかぎれで痛い〳〵といつてゐることを考へると、自分の手がありがたくなる。私は生れてから一度も霜やけが出來たことはない。私はこれ

からこの手で、一生懸命に仕事をしてえらくなりたいと思ふ。それが手の一番大切な役目である。

批評

1 大變よい題であると思ふ。自分の手などは始終見てゐるものであるが、これが綴り方の題になるとは氣がつかない。それに思ひついたのは、やはりこの作者が深い注意からである。書いた事柄も大變よいと思ふ。爪の白い點などのわけも面白い。最後に手に感謝することを書いたのはよい。(男)

2 題が如何にもよい。中々かういふ題を思ひつくことはむづかしい。自分の手を人の手と比較したり、爪の白い點を書いたりした所はよい。後で手の役目を書いたのは大變よいと思ふ。(男)

3 文題も文の書き現はし方もうまい。中々かういふ題は氣がつかない。はじめは自分の手の惡いことを書いて、後によいことを書いたのは面白い。この文を讀むと僕もこんな題で綴つて見たいやうな氣がする。(男)

4 よい題を選んだと思ひます。ありふれたことで人の氣のつかない題です。自分の手とお友達の手を比較し、裁縫のことなどを書いて、爪の白い點と着物持などを書いたのもよい思ひつきです。そして最後に手の役目を書いたのも面白いと思ひます。(女)

5 題がよい。文も面白味があつてよいと思ふ。かういふ文は、小さい事にもよく注意して深く考へる人でなければ書けない。(女)

6「私の手」などいふ題は大變よい題である。私も自分の手を見て色々考へることがあるが、まだこんな題を選んだことがない。爪に白い點がある人は着物持になるといふことも面白い。後で自分の手に感謝してゐることを書いたのは大變よい。また手の一番大切な役目を書いたのもよい。全體として大變よい文であると思ふ。(女)

第四節　綴り方の學習動機

何の爲に綴り方のけいこをするか――これは綴り方の學習動機を眺めたい爲の調査である。低學年からの發達を眺めることは、學習動機の深化を知ることが出來ると共に、綴ることの理解を確めることが出來る。これも各學年にわたつて擧げなければならないのであるが、本書ではその例として或る學年に止めて置いた。本學年は最後の成績として特に擧げて見たのである。

1 文を綴るのがうまくなる爲、自分の精神を磨く爲、自分の精神を文に現はす諫習の

爲にけいことをする。(A男)

2趣味、心を高尚にし、自分の考を現はす練習の爲にけいこをする。(B男)

3自分の精神を修養する爲にけいこをする。(C男)

4文は自分の人格をあらはすものであるから、その人格向上の爲にする。(D男)

5心がけを正しくするため。小さい時から大きくなるまでの歷史にするため。(E男)

6自分の思つたことを書きあらはし、手紙の書方をならふ爲である。(F男)

1人の感情を養ふ爲、荒つぽい性質をなほす爲、立派な精神を持たせる爲にけいこをするのである。(A女)

2(イ)自分の人格を磨く爲である。綴り方程自分の性質が表れるものはない。だから綴り方を一心に勵む事は人格を一心に磨き上げる事と一致してゐる。

(ロ)自分の記錄にする爲である。人によつては後を顧みず先ばかりを望めといふ人があるが、私は今までの事をよく考へて見なければ先方を望むことは出來ないと思ふ。(B女)

3自分の心持を本當にかける樣にする爲。そして自分の行をよくして行く爲。自分の力を表す爲。(C女)

4文章は性質をあらはすものである。いくら文章を上手に書かうとしても行が惡ければ其の文はだめである。どんな題で書いても皆自分のことを書いてゐるのである。だから文を習ふことは行を立派にすることである。(D女)

5よく自分の精神をあらはして、よくみがき養ふために綴り方のけいこをするのであると思ふ。(E女)

6文をけいこするのは、心をみがくため、又文が上手になるためである。(F女)

成績を通覽すると、綴り方の一般的な理解として「文を綴るのがうまくなる爲」とか「自分の精神を文に現はす練習の爲」とかいふ答がある。また一般的な精神修養と

見るべきものには、「自分の精神を磨く爲」―「人格向上の爲」―「心がけを正しくする爲」―「立派な精神を持つ爲」―「自分の行をよくする爲」―「心をみがく爲」などがある。感情的の方面では、「趣味・心を高尚にす。」―「人の感情を養ふ爲」―「荒つぽい性質をなほす爲」などの答がある。

　更に特殊な理解を有つたものには、「小さい時から大きくなるまでの歷史にする爲」とか、「自分の記錄にする爲」とか、「手紙の書方をならふ爲」とか、「自分の力を表はす爲」とかいふものがある。が、要するにさう分解して眺めたのでは、學習の生命ある動機を知ることが出來ない。私があらゆる調査を分解して統計的に示さないのは、本科の獨自性を尊重したからである。一人の生命ある兒童の答を、そのまゝに理解して行きたいと思ふ。いふ迄もなく、私は統計的に示すことを不必要だと思ふのではない。

第五節　兒童の創作意識

　本學年兒童の創作意識については、前學年と同樣その調査を進めたのであるが、各學年に通じて行つた五問題の調査は、多少問題の提出法を變更したものがある。これは、廣さの方面では各學年共大要似よつた答をしてゐるので、その伸展した意識だけを答へさせる方法をとつた方が、私の狙つてゐるものを得ることが出來ると思つたからである。彼等は深さの方面に伸展してゐるから、平面的な事項を數多くならべることは好まなくなる。從つてその內面的な理解を有つてゐない者は、この廣さだけを眺めて創作意識の伸展を疑ふやうになる。私はこの誤解を恐れたのである。近頃どんな文題を選ばうとしてゐるか――これも問のかたちは違つてゐても、私の狙つてゐるものに變りはない。いな、兒童はより以上的確なものを私に與へてゐる。

1 近頃どんな文題を選ばうとしてゐるか
2 文を書く前にどんな腹案をたてるか
3 どんなことに注意して文を訂正するか

4どんな文がよいと思ふか

5どうすれば綴り方が上手になるか

（A　男）

1僕は近頃形だけを書くのがきらひになつた。「――の感想」……「――の思ひ出」……「――に就いての自分の考」などゝいふ題で書くのが好きになつた。題は隨分澤山ある。題を選ぶことはきらひでない。好きだ。こんなことも題にしたらと思ふ事もずゐぶんある。紀行文がます／＼好きになつた。併し何が見えるといふ風に書かずに、とんな氣分がする……と書くのが好きだ。いふ迄もなく實のある題を選ぶやうに考へてゐる。

2文の書き出しはどういふ風にするか。
中味の順序はどうするか。
文の終りにどんな事を書くか。
どうしたら自分の考へが現はれるか。

3誤字を見つけ、同時にぬけた字をうめる。意味の分らない所をしらべ、言葉を足したり書き直したりする。句讀點を忘れないやうに、加へたり消したりする。心持の現はれない所は直す。なんべんも讀んで見ることが大切である。

4實際をよく書き現はし、自分の考の僞のない所を綴つて、その文を讀んで感動する樣な文がよい文である。また形だけを書かないで意味の深い文がよい。

5綴り方が上手になるには、ふだんの用意が肝腎である。小さい事にもよく心をとめて考へなければいけない。また人の文を讀んで見て、どこがよいか惡いかを考へて見ることも大切である。そして根氣よくやれば上手になる。

（B　男）

1僕は近頃自分の感想を書くのが好きになつたので、其の樣なたちのものを選ばうと考へてゐます。又寫生文紀行文も前から好きですから、前者と混ぜて選ばうと考へ

てゐます。

2 まづ大要を考へます。

書き始めをどういふやうにするかを考へます。

書く順序をきめます。

如何にして書いたら面白く出來るかを考へます。

書き現はしにくい所をどうするかを考へます。

結びをどうするかを工夫します。

3 文を讀み直して句のへんてこな所を直し、思ふ樣に書き現はせたかどうかをしらべます。そして書き現はしてない所を直します。字のまちがひやぬけた所もよく直します。

4 次ぎの事がなるたけよくそろつた文程よいものです。

イ作者の心持がよく現はれてゐること。

ロ作者が眞面目で本氣になつて書いてあること。

ハ寫生文なら其の場の光景が十分現はれて、目に見える樣に書いてあること。

ニ順序がよくとゝのつてゐてまとまりのあること。

ホ高尙で意味の深い文。

5 常にいろ〳〵の文集などを讀み、そのよい所をのみこみます。又見たり聞いたりする事に注意し、深く考へるやうにします。自分の文も一生懸命になつてけいこし、先生のおつしやることに注意してよく直すやうにします。さうすれば文はだん〳〵上手になります。

（C　男）

1 近頃は理科的のものを書く樣な題、例へば無線電話の說明のやうなものを考へてゐる。もとは「どこかへ行つた事」などといふ題を選んでゐたが、今はさういふのは馬鹿らしくなつて、出來るだけ變つた題を選びたいと考へてゐる。

2書く順序、どういふ風に書いたら皆にわかるか、どう書いたら味が出せるか、今日こそよい文を書かう――といふことを考へる。

3なんべんも讀み直して、ぬけてゐる字を入れる。又句讀點をつける。文の意味がわからなかつたり、まとまつてゐない所があつたら直す。

4自分の生活を正直に發表したもの、意味の深いもの、自己の成長をあらはしたものなどがよい文である。

5見たり聞いたりやつたりしたことをよく記憶してゐて、文題にこまらないやうにする。又度々文を書いてそれをよく直す。學校だけでなく家でも書くやうにする。そして綴り方の本などを讀んで書き方を覺える。

(D　男)

1近頃題を選ぶには、僕の元書いた綴り方の題を參考し、又綴り方の時間によんだ人の題を參考にしたりする。併し僕は景色をい書たり。旅行のことを書いたりするより、りくつの方が好きになつた。又ちよつとした事を深く考へて見るのも好きになつた。

2(イ)その順序をきめる。

(ロ)どういふ風な書き方にするか。例へば同じ「飯」といふ題でも「飯は大切で日本人は……」などゝたくさんならべて書くのと、飯とパンの言ひ争ひを書くのと、飯の身の上ばなし、又飯について家で起つたこつけいな話、かなしい話などを書くやうなその書き方。

(ハ)くはしく書くか、面白い所だけをぬき出して書くかなどをきめる。

3誤字を調べる。意味のとれない所をなほす。言葉づかひのおかしなところをなほす。ぬけた字を入れる。句讀點をなほす。

4意味の深い、自分の生活を正直に發表した文がよい。

5氣をつけてゐて、よい文題を選ぶやうにする。そして人の文などを讀んで、かきあ

らはし方を覺える。又一心に勉强すれば次第に上手になる。すべて苦心が大切であると思ふ。

（E　男）

1前には何處かへ行つたことを書くのがすきであつたが、この頃はそのやうな文はあまり面白くないやうになつて來た。そして「電車」とか「共同」とかいふ題で書くのが面白くなつて來た。

2どういふ事を書くか。書くじゆんじよ。この文で最も大切な所はどこかを考へる。

3文を一通り讀む。そしてぬけ字やまちがひの字をなほす。くとうてんをうつ。文のおかしな所もなほす。

4じゆんじよがちやんとしてゐる文。くだらない事は書かないで、大事な所だけを書いてある文。讀んで見てあきないやうな文。その文の中に何か深い考への入つてゐる文。實際の事を書いた文。

5見た事、聞いた事、した事などをよくおぼえてゐて、時々家でも書いて見る。人の文を讀んだ時そのうまい所を氣をつけておぼえるやうにすれば上手になる。

（F　男）

1前は自分が遊んだことや見たこと等の題を好んだが、今はそんな題は好まない。議論てきな文が好きだ。それだから議論てきな文はどうしたら出來るかと考へる。又自分が實際に行つた事などを考へて題をきめる。

2かういふ題だからかういふ風に書かなければいけないといふことを考へる。僕は文段をきらないからよく文段をきらうと考へる。こゝはかういふ風に書かうといふことを考へる。

3字がまちがつてゐるかと見なほす。「○」「ヽ」カギ等がないかと見なほす。文にまちがひがあるかと見なほす。

4自分の考へをよくあらはして、あたりの光景をよく書いた文がよい。自分の心持が

よくあらはれてゐる文もよい文である。

5自分のかいた綴り方を人によくひひやうしてもらつて、自分の文をなほす。またうまい人の文をくりかへしくりかへし讀むと上手になる。

（A　女）

1何だか近頃は意味の深いものが書きたくなつた。たゞ面白かつた事や嬉しかつた事を書くのが馬鹿らしく考へるやうになつた。

2一度文に書く通り頭の中でこしらへて見る。たとへばよそへ行つた事なら、その行つた時の事をもう一度頭の中へ浮べて見る。そしてどう書いたら自分の考がよく現はれるかを考へて見る。

3文を讀んで見て、文字の誤りをしらべ、句讀點をうち、自分には分つてゐても人には分らないやうな所を直す。又自分の心持がよく現はれなかつたり、書き足りない所などをなほしたり足したりする。

4意味が深く、薄つぺらでなく讀んで人を動かし、聞いてゐてもあきないばかりでなく、つり込まれるやうな文、心持のよく現はれた文などはよい文である。

5小さい事にもよく氣をとめて、深く考へて見るやうにし、先生の御批評などをよく味つて見る。そして文集なども讀んで見て、その現はし方を參考する。文はよくふだんから用意して、苦心して作るやうにすれば上手になる。

（B　女）

1私の心は運動と勉强と默想とが引合ひをしてゐる。隨つて綴方もその影響を受けて色々の方面に活動してゐる。この頃は主に何でも意味の深いものを選ぶやうになつた。時々こつけいな文も書いて見たいと思ふが、私はやつぱり淋しい方がよく書ける。だからやはり淋しい方を選ぶ。

2（イ）まづ順序を考へる。そしてなるたけ初は意味の淺い所を書いて、段々深くなるやうにしてゐる。

(ロ)どんな言葉をつかつたら強くいふ事が出來るかを考へる。

(ハ)文の飾りを考へる。あまり飾のない文は私は好きではない。

3(イ)意味のつゞきの惡い所をなほす。

(ロ)文字や句讀點の誤りを正す。

(ハ)考へのよく現はれない所をなほす。

4論文であつたならば、すつかり理くつが通り同じことを繰り返さない文。あまり當り前の事を書きならべない文。紀行文であつたならば、聞いてゐる人が自分でもそこへ行つてゐるやうな氣のする文。あまり電車の事や時間の事等は書かないでもよい。田舍に行つたなら田舍らしいのんびりした氣持が讀む人にも聞く人にも起るやうな文。淋しい事嬉しい事樂しい事悲しい事等を表はした文は、聞いてゐる人は自ら淋しい氣持樂しい氣持になる樣な文。相當に裝飾のある文がよい。

5文は心の鏡であるから、まづ自分の心をりつぱにすることが大切である。そしてふだん色々の事に注意し、他人の文も參考して、よく考へて書けば上手になる。自分の文を多くの人に批評して貰ふことも大切である。

（C　女）

1どこかへ行つたことなどの題はあまり好まなくなつた。深く感じた事、例へば惡いことをしてすまなかつたこと、感心な子供を見たこと、かはいさうなものを見たこと等を題にするのが面白くなつて來た。景色を題にすることも好きである。

2イ書く事柄をある限り並べて見る。

ロ其の中でよいものを選ぶ。

ハ順序を考へる。

ニ書き現はし方を考へる。

3イ一度讀んで意味の變な所を直す。

ロ字のまちがひがないやうに注意する。

ハ句讀點を正しくうつ。
ニすつかり直してからもう一度讀んで見て、どれ位に書けたかを見る。
4自分の生活を正直に發表したもの、意味の深いもの、自分の成長を表はしたものがよい文である。
5ふだんよい題を選ふやうに氣をつける。そして題がきまつてもよく考へてその書き現はし方を工夫する。又人の文も澤山讀んで參考する。そしてあきずに一心にやれば上手になる。

（D　女）

1よい題が中々見つからないので、題をえらぶことがいやになつて來た。小さい時のやうに「誰々の家へ行つたこと」等といふ題はつまらなくなつて來た。景色の文を前には好きであつたが、今は書きあらはし方かむづかしいので書かない。今私は何かの樂しみといふやうな愉快な題が好きである。

2イ書く事がらを考へる。
ロ書く順序をきめる。
ハ書きあらはし方を考へる。
3一度讀んで見て、まちがつた字があるか意味の通じない所はないかとしらべる。又句とうてんもしらべてなほす。
4意味が深くて、書きあらはし方もよく出來てゐて、人の心を動かすやうな文がよい。又景色の文であつたら、讀む人の頭にはつきり其の景色を浮べさせるやうな文がよい文である。
5雜誌や本にあるよい文を參考する。そしてよい題を見つけて家でも練習する。先生のおうつしやつた事などを忘れないで文を直すやうにすれば上手になる。

（E　女）

1此の頃私はどこかへ遊びに行つたとか、又自分の家に誰かが來て遊んだとかいふ樣

な文を書くのはいやになつた。そして題を選ぶ時にはいつも自分の小さい時の思ひ出、又面白い活々したこと、自分の希望などについてよい文の種になりさうな事はないかと考へてゐる。

2 文のすぢを考へ、題にあてはまつた文を書くやうに工夫する。

3 一度はじめから讀んで見て、字がぬけてゐるかゐないか、字に誤りがあるかないかを見る。句とうてんに氣をつける。ことばのおかしな所をなほす。

4 景色や心持がよく現はれてゐる文がよい文である。

5 自分の思つたことを正直にかいて、よく直すやうにすれば上手になる。うそを書いてゐては上手にならない。又上手な人の文を讀む。たとへば岡村さんのやうな文をよく讀んで、よい所をおぼえるやうにする。

（F　女）

1 割合に近頃は題がよく見つかるやうになつた。又近頃はりくつつぽい文が嫌ひになつて、よい景色などののんびりした文が好きになつた。それで私は景色の文を書かうと思つてゐる。

2 イ どういふ事を主に書かうかと思ふ。
ロ 文のすぢを立てゝ見る。
ハ 内容がよいかわるいか考へて見る。
ニ 大切な事をくはしく書かうと考へる。

3 文にへんな所がないかを調べる。字のまちがひがないかをしらべる。てんやまるをはつきりうつたかどうかをしらべる。

4 内容が十分にあつて、事柄がはつきりしてゐて、すぢがきちんと立つてゐる文がよい文である。

5 ふだん氣をつけてよい題を選ぶやうにし、文のわるい所をよく直すやうにすればよい。ざつしなどに出てゐる文をよんで、よい所をおぼえる。

取材については内面的な傾向がはつきり見える。感想や思ひ出や意見などを題材にしようとするのがそれである。「深く感じた事柄」・「何かの樂しみ」・「氣分を現はすもの」などいふのもそれである。男兒が理窟つぽい題材を選ばうとするのも、尋常五學年あたりからの傾向である。男兒も女兒も、おぼろげながら一つの人生觀を有つやうになる。人生觀とは言へない迄も、人生の問題については相當の意見を有つやうになる。理科的の題材を選ばうとする者もある。取材について過去の文集を參考したり、他人の題材に注意したりするのも面白い。紀行文や寫生文を好む者もある。或る女兒は理窟つぽい文は嫌ひだといつてゐる。近頃は實のある題材を撰ばうとしてゐるといつたのも面白い。

腹案については、「文の順序」・「書き出し」・「終り」など前學年に見えた事項もかなり多い。「文の中味」を加へたのは面白い。また、「味を出さう」・「精しく書くか略して書くか」・「大切な所を落さないやうに」などいふ答は、前學年にも見えたものである。が、「すべてのことを頭の中に浮べて見る。」とか、「頭の中で文をこしらへて見ろ。」とかいふのは、これ迄に見られない答である。また、「どうして力を出すか。」とか、「文の飾りを考へる。」とか、「文段を切る。」とかいふのも、本學年の傾向として面白い答である。「どうしたら自分の考が出るか。」とか、「どうしたら皆にわかるか。」とかいふことは、本學年に特に發見した傾向ではないが、腹案の一般的な意識として注意すべき事項である。

推敲の方面では、深さは別として廣さの上では前學年と比較して非常な相違を發見しない。誤字・脫字を見出したり、句讀點を補正したりすることは、低學年から意識の內容となつてゐる。意味の不明や、心持の現はれてゐないところを訂正することも、これ迄の調査に現はれてゐた事項である。が、用語についての意識は、本學年になつてかなり濃厚になつて來たやうである。兎に角、この成績を見ても尋常六學年迄の伸展では、文の推敲について過重な要求の出來ないことが解かる。

文章觀の發達については相當見るべきものがある。この頃の兒童になると、よい文といふことに一つの見識を有つやうになる。「心持を現はしたもの」・「意味の深いもの」・「くだらない所をぬかして大事な所を書いたもの」・「はつきりしたもの」・「僞らないもの」などは、これ迄も文章觀の內容をなしてゐたものであるが、「自己の生活を正直に。」とか、「自己の成長を現はしたもの。」とかいふのは、文章觀のまとまりを示すものと見てよい。「相當に裝飾のある文。」——「內容の十分ある文。」——「筋がきちんとしてゐる文。」——「理窟がとほつた文。」——「讀者の感動する文。」なども、本學年の傾向として見落すことの出來ないものである。また、「B男」が「高尙な意味の深い文」といつたのも嬉しい。本學年兒童の文章觀が、個々にまとまつてゐるのも、確に六個年の伸展を想はせるものであると思ふ。

學習の態度については前學年と大同小異である。見ることでは、平生の用意や、小さい事にでも注意することや、よく記憶してゐることなどが擧げられてゐる。綴ることでは、根氣よくやることや、學校ばかりでなく家でも綴るべきことや、苦心の大切なことや、批評して貰ふことなどが數へられてゐる。讀むことでは、「他人の文に注意することを忘れない。」これは、低學年から彼等の意識內容となつてゐる事項である。なほ、よい文はよい心から生れるものであるから、自己の精神を磨くことが肝要だと述べたのも、學習の態度として美しいものである。要するにこれ等の調査が、廣さから深さへ、一般から特殊へ、斷片からまとまりへ伸展したことは、最後の學年として愉快な事實である。

第六節　本學の指導要項

例によつて發達の傾向に關する記錄を見ると、かなりの一致點を發見することが出來る。馬淵氏の記錄は第五學年の場合に揭げて置いたから略すが、氏が「六學年になると感想や意見を多く發表するやうになる。」と述べられたのは、特に注意を要するも

のである。芦田氏が、本學年の兒童が何處となく大人びて來るとも、人生にふれたものを書き始めるとも、時事問題をとらへるとも述べられてゐるのは、主として取材の方面から眺めたものである。內面的な意識についての記錄は見出せない。

五味氏は、本學年の兒童について感情中心の叙述が鮮明となるとも、抒情的文學的の發達をするとも、心理的描寫の域に進み靜觀的の態度をとるとも記錄されてゐる。また田上氏は、前學年の傾向をうけて、更に客觀的から主觀的に移る時代であると述べられてゐる。田中氏の記錄には、人生問題社會問題について深く入るとか、抽象的なことを叙述するとか、性別的の思想も出て來るとかいふ傾向も發見する。兎に角、本學年の傾向として社會問題や時事問題をとらへるとか、主觀的の色彩が鮮かになるとかいふことは、多くの研究者によつて述べられた事項である。

私は例によつて取材の方面からその傾向を眺める。外面的に見れば、時事問題や社會問題もとらへて取材の廣さが增して來る。內面的に見れば、彼等の文章觀の內容である、意味の深いもの――が中心になつて想の熟すのを待つやうになる。平凡に飽きて來る。何か新味のあるものはないかと注意する。理窟つぽい文を書くから、人間味の豐かな、感激的な文を好まないといふのではない。寫生文を好み紀行文を愛するのも、彼等の深さを愛する心と變りはない。題材があるといふのも無いといふのも深さや新味を求める心から見れば一つである。

腹案の方面では、前學年と比較して大なる相異を見出せない。が、漠として目覺めつゝあつた傾向が、本學年になるとかなりはつきりして來る。議論の文では自分の意見がはつきりしなければいけないとか、叙景の文ではその場景が目に見えるやうでなければいけないとか、また、自分の考を述べる文では讀者が感動するやうでなければいけないとかいふやうになる。一言で盡せば、ものにより場合によつて手法を工夫するやうになる。心持を現はさうとして言葉を吟味することも、人生觀乃至は理想によつて事象をアイデアライズすることも、美感によつて文の修飾を考へることも、この

頃の傾向であると思ふ。彼等に向つて表面的な無技巧やありのまゝを說くことは、彼等の欲求を滿すものではない。

批正は自己訂正が發達する。誤字・脫字などを見出すだけでは滿足しなくなる。內容や手法の吟味に入つて補正するやうになる。けれども、誤字や脫字は本學年になつてもかなり發見する。現はし方の巧拙なども考へて訂正するやうになる。相互批正が有效である。批評力や鑑賞力が發達して、文のまとまりとか、心持とか、深さとかいふ方面を凝視するやうになる。そして、批評や鑑賞の時間を待遠く思ふやうになる。

文章觀は廣さと深さの方面に調和的に發達する。よい文に對する答が的確になつて來る。これは創作意識の調査を參照して理解して貰ひたい。彼等の生活に關する內省が一時の思ひつきでなく、理想とか人生觀とかの構成によつて統一されて來る。文章觀もさうした傾向をもつて統一されて來る。男女によつて色彩を異にして來る。趣味が個性的になつて現はれる。學習の態度は、綴り方の本質に向つて興味を有つやうになり——外面的な興味も相當に燃えてゐるが、內面的に目覺めて來ることは嬉しい。個性によつて多少偏した方面に發達する者もある。が、私の經驗では、一生を豫斷するやうな資料を得ることが困難であつた。彼等の希望を聞いても、法律に關する研究などは見られなかつた。頭のよい兒童が多くよい文を書いてゐた。頭がよいといふのは決して論理的にばかり眺めたのではない。人間性の深みへ押し進む兒童もある。いな、かういふ兒童が何時も綴り方の本質的な方面に興味を有つて、意味の深い味のあるよい文を書いてゐたのである。

指導要項

一取材

1 物事を內面的に見るやうにする。

2 なるべく熟した意味の深いものを取るやうにする。

3 感想や議論に關する題材の指導をする。

4書簡文を稍系統的に指導する。

二腹案

左の手法について指導する。

描寫　中心　主客　統一　手法の行詰り

三記述

1文段を正して綴らしめる。

2一般的な記述の約束に慣れさせる。

四推敲

左の事項に注意して自已訂正の習慣を養ふ。

用語の適否　心持　まとまり　深み　補正

五鑑賞と批評

1生活鑑賞の態度を養ふ。

2參考文を與へ左の事項に注意して鑑賞と批評を指導する。

内容と手法　新味と深み　現はし方の多方　文の修飾

六文話

1想の爛熟をはかる指導をする。

2新味(初歩)を見出す指導を中心として綴らんとする心を養ふ。

3文章觀の發達をはかる。

イ眞劔な發表

ロ新味(深み)あるもの

大正十四年四月十五日印刷
大正十四年四月[illegible]十日發行

兒童創作意識の發達と綴方の新指導

定價金參圓參拾錢

培風館

著作者　飯田恒作

發行者　神田區錦町一ノ六　山本慶治

印刷者　小石川區關口水道町四六　茶畑菊太郎

印刷所　小石川區關口水道町四六　有隣印刷株式會社

發行所　東京市神田區錦町一ノ六　培風館　電話大手四八九二　振替東京三二六一七

263,2
207

終